

【鵲】かささぎ

カササギと称する鳥は朝鮮半島・九州・台湾に住むカラス科の鳥で、おながに似た姿で光沢のある黒色、肩・胸・腰が白い留鳥だそうです。この鳥は『日本書紀』により推古六年（598）に新羅よりつがいで献上されたことが『日本書紀』に伝えられています。しかし、少なくとも畿内に生息するには至らなかったようで、貴族の間で唐文化としてその名と伝承を受容したに留まったようです。

しかし、江戸時代初期に再び朝鮮より持ち込まれ九州に生息するようになったようです。そのほか別にサギの一種で笠鷺の字につくる鳥がいるそうです。

但し、七夕の夜、天の川に翼を寄せ合い、織姫と彦星を会わせるという橋を作るという鳥は中国の伝説的な鳥であり、実際の鳥にモデルを求めない方がよさそうです。

牽牛星は鷲座(Aquila)の Altair、織女星は琴座(Lyra) α の Vega のこと。

二星の漢名は既に『詩経』に見られますから遅くとも紀元前七・八世紀には人格化した伝説があったものと思われまます。

鵲は私の知る限りでは『淮南子』が初見です。

農耕民族特有の星の観察が下地にあり、いつしか男女に人格化したのでしょう。

七夕祭りは古く中国では乞巧奠(きかうでん)といわれました。乞巧とは巧を乞う、すなわち女の子が二星を祭り、手芸の上達を乞うのです。

ご承知のとおり、1月7日・3月3日・5月5日・7月7日・9月9日は陽の数が重なる五節句であり、7月の上旬に二星は接近するのです。

ちなみに、いにしえの日本人は何故か、星に興味がなかったようです。

その証拠に月の歌の膨大な量に対して、どの歌集も星の歌はごくわずかです。

しかも古歌は七夕など中国の古典を根拠に詠んでおり、生活に根ざした星の歌は近代になるまでほとんど見受けられません。幾つか例を挙げましょう。

- ・天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ 『万葉集』人麻呂歌集より
- ・わが上に露ぞ置くなる天の川門渡る舟のかいの雫か 『古今集』よみ人知らず
- ・かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける  
『新古今集』大伴家持
- ・たなばたの扇の風に霧晴れてそら澄み渡る鵲の橋 『新撰朗詠集』清原元輔

皆様は夏の床にすっきりと短冊を掛けようと思われたことがおありでしょう。

私もそう思い、かつて星の歌でもと思い探したのですが、〇〇閣から××堂まで当りましたが、星の歌などありませんでした。

なぜ星の歌が少ないのか未だに納得のいく説には出会っておりません。いにしえ人は夜の空には専ら月を眺めていたようです。

七夕祭に関する銘になりそうな言葉を思いつくまま上げれば、七夕・牽牛・織女・乞巧奠・鵲・笹葉・短冊・天の川・河漢・銀漢・天漢・天の海などでしょうか。天の川以下の言葉は同義語です。

七夕の趣向で糸巻の蓋置、傘牛の香合などは定番ですね。存星の盆などお持ちの方は使いたくたしょうがないでしょうね。各流派の好み物もあるようです。裏千家には亀蔵棗や三光棗があります。たしか表千家に中板が糸巻形の棚がありましたね。

私はずいぶん前のことですが七月の茶会に、笹の葉形の義政好み写しの茶杓を使ったことがあります。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~